

成績不振学生・不登校学生等への支援の現状と課題(2)

国立教育政策研究所 立石 慎治

前回連載（本誌No.429）では、成績不振学生・不登校学生等への支援の現状と課題に関する全国的な傾向等をアンケートデータの結果を通じて紹介した。前回の末尾において

「調査結果からは、大学等の教職員が学生の状況を把握したり、関係者・部署間で連携したりすること、早期発見・初期対応に努めていることがかいま見える。他方で、学生の学修へのレディネスについての課題を感じつつも、そうした面での支援の取組が必ずしも広まっているわけでもないことも結果からは窺われ」ることを指摘した上で、各機関が今後の第一歩を踏み出すために資するヒントを得るべく、事例を紹介することを約束した。

そこで今回は、『大学教育の継続的変動と学生支援―大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成二十七年）度より』に収録された実地調査報告書より、四国大学と千葉工業大学を紹介する（立石二〇一七a、b）。なお、各大学に関する記述は上述の実地調査報告書の一部に基づいたものであり、詳細については当該報告書を確認されたい。また、

記述は原則、報告書の刊行当時における事実に基づいていることを申し添える。

四国大学の概要とその取組

四国大学は、「全人的自立」を建学の精神とする、四学部を擁する大学である。地元からは「きめ細かい教育」「面倒見の良い大学」との評判を得てきた。学生の資質・志望の多様化が進む状況に鑑み、学修支援センターを設立した。当該センターでは各種の取組を通じて、基礎学力の底上げや、学習意欲の喚起、対人関係の悩みによる中退の防止等をねらいとしている。センター開設以降、延べ九〇〇名もの学生が利用している。センターに頻繁に通う学生が毎年一定数は存在しており、その中には学修支援によって中退せずに済んだ者もいる。

そうした取組の一つに、高校の基礎科目についての学び直しを行うプログラム（学習サポートプログラム）がある。単位は授与されないものの、入学時からスタートする当該プログラムは、全学生を対象とし、誰でも受け

然防止を図ることも極めて重要である。成績不振等の学生への取組のうちでは、関係者間の連携が多く、個別支援や補習講座は多くなかったことを思い出してほしい。四国大学の学修支援の取組は、成績不振等に陥る恐れがある者に、その前に支援を提供している点で注視したい取組である。また、そうした取組を発展させるために連携を生かそうとしている。こうした取組の姿勢は、他の多くの大学にとっても参考となるものと考えられる。

千葉工業大学の概要とその取組

千葉工業大学は「世界文化に技術で貢献する」を建学の精神とする、私立の工学系大学にあつては我が国最古の大学である。伝統ある千葉工業大学も二〇〇〇年代中頃より、学習意欲に乏しい学生、成績不振の学生、不本意入学の学生が入り乱れるようになり、留年・退学者数が増加してきていた。様々な調査を重ねた結果、留年・退学者の多くが成績不振・不登校の学生であつたことがわかつたことから、各種の取組に着手し始めた。

千葉工業大学の取組を、学修支援と学生生活支援の二つに分けて紹介しよう。

学修支援は、入学後はもちろんのこと、入学前にも提供される。入学予定の生徒を対象とした入学前準備プログラムや、高校で未履修の科目（物理や化学）に関するeラーニングを提供している。入学後には、一、二年生が通う新習志野校舎に設置された学習支援センターにおいて、高校時代の不得意科目の復習のサポートや相談等のサービスを提供している。正課に関しても、補充・補習授業ならびに再試験の制度を全学的に導入している。

学生生活支援として、不登校学生の学修復帰に向けた個別指導と、ピア・サポートを提供している。個別指導を支える仕組みがユニークである。博士課程修了生をポストドクトラルフェロー（PD）として採用している。欠席がちな学生に接触し、相談に乗るが、複数名いるこのPDのチームは、長期欠席者リストのデータを分析して、不登校の兆候を検討しながら支援に当たっている。また、ピア・サポートの仕組みとして、二〇一三年度より、学士課程の三、四年生を学生サポーター（Student Assistant：SAとも）の名称のもと配置している。

PD、SA制度により学習支援センターを訪れる学生は増えた。また、補習・補充授業や再試験の実施が徹底されてきたことも相俟つて、留年者・退学者数は減少に転じるという成果が得られている（例えば、退学者数は二〇一三年度五〇七名から二〇一四年度三九九名、二〇一五年度二五四名）。

様々な取組がなされているが、その基盤にあるものの一つに、情報共有の仕組みを挙げることができる。学生に関する情報等は、教務委員会、学修支援担当職員、学習支援センター職員およびPDが定期的もしくは随時共有する機会が設けられている。共有された情報（単位取得状況や出席状況など）に基づき、クラス担任や学生本人、保証人（保護者）への対応につなげることになっている。

各取組の更なる成果を求めて、教職員が疲弊せず、安定的に支援が行える体制の整備が千葉工業大学では目指されている。これらの取組の根底で意識されているのは教職員の負担であり、「継続可能性が考慮されている」

られる。大学での学習に必要な教科を高校で履修してこなかった学生等を対象としつつ、中学校レベルを前提として、ギャップを埋めるための学習が提供される。

学習サポートプログラムにも課題がまったくないわけではない。当該プログラムの受講が基礎学力の向上につながるという成果を積み重ねてきた一方で、この種の支援が必要な学生すべてにリーチできていないという実態もある。また、支援から途中でフェードアウトしてしまう学生も出てくるといった問題が起きている。既に述べたとおり単位が授与されないために、受講のインセンティブがそこまで強いわけではない。

成果を得つつも、こうした課題に直面していることを踏まえ、次の一步として、ニーズのある学生に早くかつ漏れ無くリーチし、各種の支援を継続的に受けてもらうべく、センターと学科との連携を更に行うことの重要性が当該センター関係者の中で共有されている。成績不振学生・不登校学生等の問題は、起きてからのケアも重要であるが、同時に、未

（立石二〇一七b）。入学前教育やその後の支援、正課内における補充・補習授業、再試験、PD・SAといった仕組みは、成績不振等に陥り困っている学生への支援をそれぞれの立場から分担しているものと理解できるだろう。成績不振等の問題であれば、どうしても個々の学生の状況に寄り添って個別に支援をしなければならぬ局面はある。それを続けていくためにも、長期的な視点に立って、継続可能な体制作りを意識している千葉工業大学の姿勢は、他の多くの大学にとっても参考となるものと考えられる。

今回紹介した内容は、二つの大学の全容に程遠い。詳細については、実地調査報告書や当該大学を紹介した他の記事等を参照してほしいが、いずれにしても重要なのは、そこで得られた気づきに照らして、自機関の文脈に翻訳することであろう。二つの事例には、現状をしっかりと認識し、次の一步を踏み出し始めているその姿勢という豊かな学びが溢れている。

△参考文献▽

日本学生支援機構 二〇一七 『大学教育の継続的変動と学生支援―大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成二十七年）度より』
立石慎治 二〇一七a 「学生支援の取組状況に関する実地調査報告書（四国大学）―日本学生支援機構『大学教育の継続的変動と学生支援―大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成二十七年）度より』一三三―一三五頁
立石慎治 二〇一七b 「学生支援の取組状況に関する実地調査報告書（千葉工業大学）―日本学生支援機構『大学教育の継続的変動と学生支援―大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成二十七年）度より』一三七―一三九頁